

## 放課後活動支援・学校支援の効果に関する実証的研究 —児童・生徒や教員の意識・行動への影響を探る—

金藤ふゆ子(文教大学)

1

## 1. 問題の所在: 日本の研究の現状

- 保護者や地域住民による学校支援の効果を実証的に解明する研究は、十分とは言えない。
  - イギリス、ドイツ、アメリカ等では、放課後活動支援の効果に関する実証的研究が取り組まれている(StEG 2010, Carpenter et al. 2011, Ofsted 2006, 2008, 2009, Cummings et al. 2006, 2007, McBeath et al. 2001)。その多くは児童・生徒の変化(特に学力)の観点からの検証が中心である。
  - 日本でも、放課後活動の参加児童の変化を明らかにする研究はいくつかある(日本システム開発研究所, 2008年, (財)青少年野外教育, 2008年, 2009年, 明石, 岩崎, 金藤他 2012)。しかし、保護者や地域住民の学校支援の効果を、教員側から検証する研究は、管見する限り殆ど見られない。

## II 研究の方法: 分析枠組みと本発表の関連

【研究の目的】

児童生徒の放課後活動支援、学校支援の実態と効果の解明

【研究の方法: 統計的調査】

(1) 5か国の児童対象調査

日本児童  
イギリス児童  
フランス児童  
ドイツ児童  
韓国児童

(2) 学校教員調査

日本の小中学校教員調査

【研究の方法: 質的調査】

(3) 海外の国・首都部の教育行政関係者、学校関係者対象の現地ヒヤリング調査

イギリス  
フランス  
ドイツ  
韓国  
アメリカ<sup>3</sup>

## 児童対象調査から得られた知見

- 日本の児童は放課後を子どものみで過ごす割合が高い。
- 放課後子ども教室への参加は、児童の日常の遊び友達の人数を増やす。
- 放課後子ども教室への参加は、児童の関心・意欲、人間関係能力、文化的作法・教養等への意識を高める。
- 放課後子ども教室への参加日数が多い程、児童の関心・意欲、人間関係能力、文化的作法・教養の力を高める。

4

## 教員対象調査から得られた知見

1. 学校内での放課後子ども教室の実施は、小中学校教員の児童・生徒への肯定的評価を高める。
2. 学校支援地域本部などによる学校支援は、小学校教員の仕事負担感を軽減する。
3. 学校・家庭・地域の連携に対する教員の意識は職務遂行意識と関連する。小学校教員の連携重視の意識は、職務上のやりがい感・同僚肯定感と正の相関があり、反対に仕事負担感・マンネリ感とは負の相関関係にある。
4. 学校支援と教員のストレスの程度との間には関連がある。保護者とのコミュニケーションが取れている教員や、連携重視の教員のストレスは低い。

5

## Ⅱ-1 統計的調査の主な内容

### 【調査内容：質問紙調査の場合】

#### (1) 児童対象調査の場合

- A. 調査時1週間前の放課後の家庭で過ごし方や、学校での放課後活動への参加状況を問う設問、
- B. 児童の自尊感情、規範意識、職業観、関心・意欲、人間関係能力等意識を問う設問
- C. 児童の価値観を問う設問等

#### (2) 教員対象調査の場合

- A. 勤務校における「放課後子ども教室」や「学校支援地域本部」の実施状況に関する設問
- B. 職務遂行上の意識に関する設問
- C. 職務に対する自らの変化や、児童・生徒の変化に対する意識の設問等

6

## Ⅱ-3 児童対象調査の回収状況

表1 児童対象調査の国別調査票配布数、有効回収数、有効回収率

国名	調査対象学校数	調査票配布数	有効回収数	有効回収率
1. ドイツ	・ベルリン市内小学校 6校	—	376	—
2. イギリス	・ロンドン市内小学校 5校 ・ケント州内小学校 9校	—	507	—
3. フランス	・パリ市内小学校 10校	—	370	—
4. 韓国	・ソウル市内小学校 2校	1,247	1,171	93.9%
5. 日本	・東京都C区内全小学校 8校 ・東京都K市内全小学校 19校	6,062	5,307	87.5%
総計	小学校 計59校	—	7,731	—

\*表中の空欄は調査票配布数。有効回収率の算出不可を意味する。

表2 国別に見た児童対象調査の実施時期

国名	児童対象調査の実施期間
1. ドイツ	ベルリン市内ヒヤリング対象2校は2011年2月～3月末 その他のベルリン市内4校は2011年9月～10月末
2. イギリス	ロンドン市内クロイドン地区校は2010年11月1日～30日 その他ロンドン、およびケント州は計14校。2011年9月～11月末
3. フランス	2011年9月～10月末
4. 韓国	ソウル特別市内2校2011年5月15日～6月10日
5. 日本	東京都C区全8校、同じくK市全19校。2011年1月15日～2月末

7

## 教員対象調査の概要： 第1次調査：K県小中学校教員調査

- ・ 調査時期：2012年2月1日～2月末
- ・ 調査方法：
  - 郵送による質問紙調査法、
  - K県内小中学校教員の悉皆調査
- ・ 表3 K県教員調査の計画標本数、有効回収数、有効回収率

	計画標本数	有効回収数	有効回収率
1. 小学校	2,451名	1,327名	54.1%
2. 中学校	1,269名	802名	63.2%
合計	3,720名	2,129名	57.2%

8

## 教員対象調査の概要： 第2次調査：全国小学校教員調査

- 調査時期：2012年9月24日～10月23日
- 調査方法：郵送による質問紙調査
- 標本抽出：
  - 全国公立小学校21,121校(2011年5月1日時点)の中から地域、及び在籍児童数によって層化した層別2段無作為抽出法により抽出。計600校を抽出し、各校に5票の教員調査票を配布した。
- サンプリング誤差：
  - 小学校教員の母集団を418,707人(平成24年度学校基本調査)とすると、全国小学校教員調査のサンプリングによる誤差は最大で±2.9%。

表4 全国小学校教員調査の計画標本数、有効回収数、有効回収率

	計画標本数	有効回収数	有効回収率
全国小学校教員調査	3,000名	1,213名	40.4%

(学校数では、回収数は計275校、学校数の有効回収率は45.5%)

9

## Ⅲ 分析結果

### Ⅲ-1 学校を場とする放課後活動の児童への効果

10

## 児童の放課後の過ごし方と、学校を場とする放課後活動への参加状況(5か国比較)

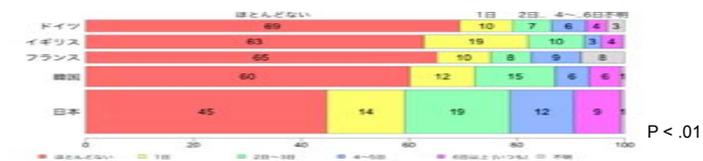


図1 過去1週間の放課後に帰宅後、1人または子どもだけで過ごした日数

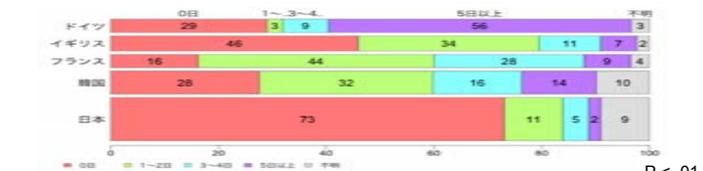


図2 過去1週間に学校の放課後活動に参加した日数

P < .01

11

## 放課後活動の児童への影響 — 日常のライフスタイルとの関連 —

表5 児童のライフスタイルと放課後活動参加との関連に関するクロス分析、 $\chi^2$ 検定結果

日常のライフスタイルに関する調査項目	P値(両側)
1. 調査時の1週間のテレビ視聴時間	.442
2. 調査時の1週間の帰宅後子どものみで過ごした日数	.420
3. 調査時の1週間前に、いつも遊んだ友人の人数	.000***
4. 学校の授業以外で勉強する時間数(塾等を含む)	.133
5. テレビゲーム・コンピュータゲームの使用頻度	.726
6. インターネットの利用頻度	.689
7. マンガ本を読む頻度	.920

表6 放課後活動参加の有無別にみたいつも遊んでいる友人の人数 n = 3,708

	いない	1人	2-4人	5-9人	10人以上	不明	N (日本)
参加した	3.1	4.2	43.2	29.0	19.8	0.5	731
参加しなかった	8.9	5.7	46.1	27.2	11.8	0.3	2,977

12

表7 児童の意識—7つの変数と21項目—

領域名	調査項目名
1. 自尊感情	1.自分のことが好きである 2.家族を大切にできる人間だと思う 3.今、住んでいる町が好きである
2. 共生観	4.悲しい体験をした人の話を聞くとつらくなる 5.友達がとても幸せな体験をしたことを知ったら、私までうれしくなる 6.人から無視されている人のことが心配になる
3. 関心・意欲	7.もっと深く学んでみたいことがある 8.体験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい 9.分からないことはそのままにしないで調べたい
4. 規範意識	10.交通規則など社会のルールは守るべきだと思う 11.電車やバスに乗ったとき、お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずらうと思う 12.他人をいじめている人がいると、腹が立つ
5. 人間関係能力	13.けんかをした友達を仲直りさせることができる 14.近所の人にあいさつができる 15.初めて会った人とでもすぐに話ができる
6. 職業観	16.自分にはなりたくない職業や、やってみたい仕事がある 17.大人になったら仕事をするべきだと思う 18.できれば、社会や人のためになる仕事をしたいと思う 19.年に何度か、親戚のお墓参りに行くべきだと思う
7. 文化的作法・教養	20.年上の人と話すときは丁寧な言葉、年下の人には優しい言葉を使い話すことができる 21.自分の国の昔話を話すことができる

13

表8 国別・放課後活動参加の有無別  
21項目のクロス分析・ $\chi^2$ 検定結果

領域	項目名	ドイツ	イギリス	フランス	韓国	日本
1自尊感情	1.自分のことが好き				p < .1	
	2.家族を大切にできる				p < .05	
	3.住んでいる町が好き					p < .1
2共生観	4.悲しい体験聞くとつらくなる					
	5.友達の幸せな体験嬉しい				p < .1	
	6.無視されている人が心配					p < .1
3関心・意欲	7.深く学んでみたい				p < .1	p < .01
	8.何でもチャレンジしたい					p < .01
	9.分からないこと調べたい					
4規範意識	10.社会のルールは守るべき			p < .05		P < .1
	11.お年寄りに席をゆずる			p < .05		
	12.いじめた人に腹が立つ				p < .1	
5人間関係能力	13.友達を仲直りさせられる					p < .01
	14.近所の人に挨拶ができる				p < .1	p < .01
	15.初めて会った人と話せる				p < .1	p < .01
6職業観	16.なりたくない職業がある			p < .05		
	17.大人になったら仕事するべき					
	18.社会や人のため仕事したい				p < .05	p < .1
7文化的作法・教養	19.年に何度かお墓参りに行く			p < .1		p < .01
	20.丁寧な言葉や、優しい言葉を使い話すことができる					
	21.自国の昔話を話せる				p < .01	p < .01

放課後活動の参加と児童の関心・意欲との関連  
—参考:妥当性の検証—

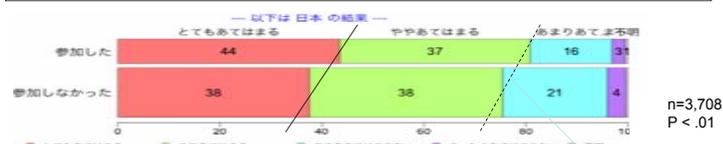


図3 放課後参加の有無別「経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい」



図4 学年別「経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい」  
(国立青少年振興機構全国調査 2010)

15

放課後活動への参加と児童の人間関係能力との関連  
—参考:妥当性の検証—

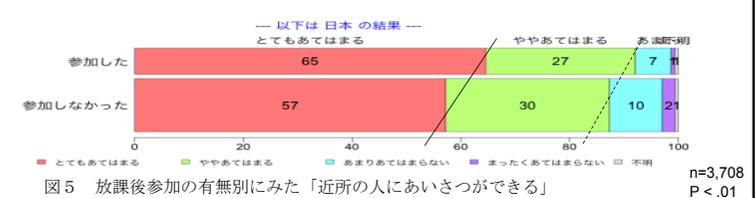


図5 放課後参加の有無別にみた「近所の人にあいさつができる」

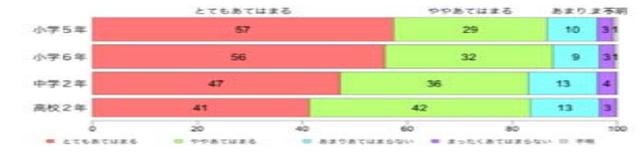


図6 学年別「近所の人にあいさつができる」 (国立青少年振興機構全国調査 2010)

16

放課後活動への参加と児童の文化的作法・教養との関連  
—参考: 国立青少年教育振興機構の全国調査との比較—

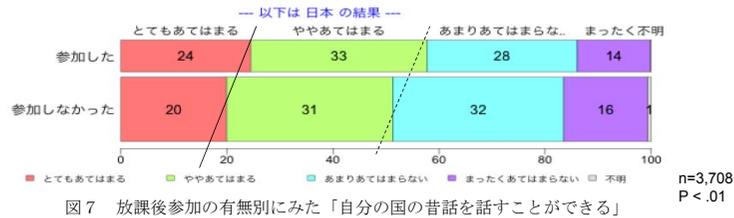


図7 放課後参加の有無別にみた「自分の国の昔話を話すことができる」

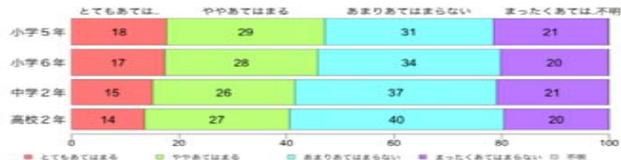


図8 学年別「日本の昔話を話すことができる」(国立青少年教育振興機構全国調査 2010)

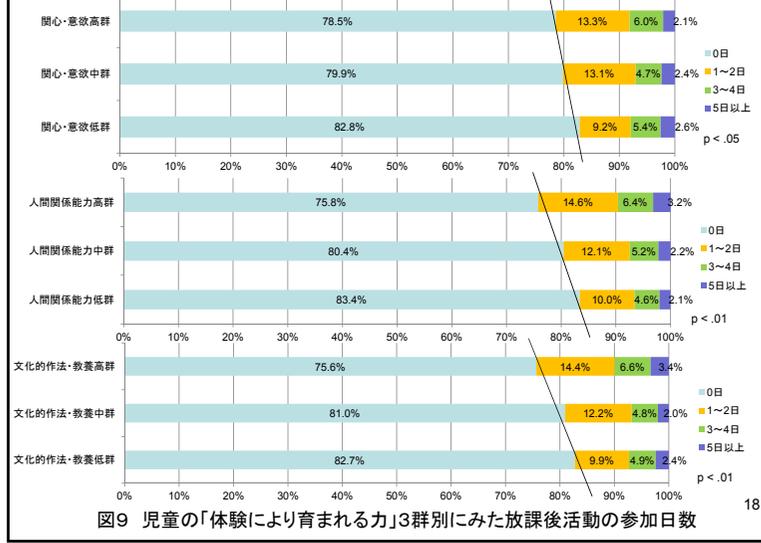


図9 児童の「体験により育まれる力」3群別にみた放課後活動の参加日数

Ⅲ 分析結果

Ⅲ-2 放課後活動支援、学校支援の教員への効果

分析枠組み: 学校支援と教員の意識との関連

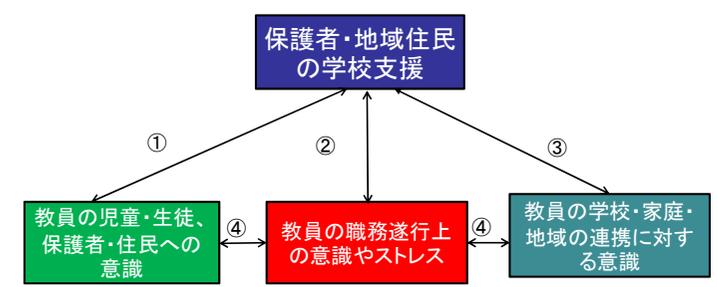


図10 分析枠組み

## 学校を場とする放課後活動支援が教員に及ぼす効果1 —子どもの活動への安心感を高め、外部者への抵抗感を低める—

「放課後子ども教室」を学校内で実施する学校に勤務する教員は、子どもを学校内で活動させる安心感が高く、教員以外の方が学校に入る抵抗感が低い。また、K県中学校教員は、放課後の負担の軽減を感じる傾向も強い。

表9 放課後子ども教室の学校内外の実施と教員の意識変化との関連

	K県の小学校 教員	K県の中学校 教員	全国小学校 教員
1. 地域の人と良く話をするようになった	43.5% *** 32.1%	n.s.	n.s.
2. 安心して子どもを学校内で活動させられるようになった	50.6% *** 30.0%	51.5% *** 22.2%	50.7% * 33.7%
3. 教員以外の方が学校に入ってくることに抵抗がなくなった	57.1% *** 36.2%	63.1% *** 28.6%	60.3% *** 37.6%
4. 放課後の負担が軽減した	n.s.	47.3% *** 19.5%	n.s.
5. 放課後のスポーツ活動や部活動がやりづらくなった。	n.s.	n.s.	n.s.
n	1,327	782	1,213

(注:セルの上段は学校内で「放課後子ども教室」を実施する学校、下段が学校外で実施する学校に勤務する教員の「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の肯定的回答の割合。\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ ) 21

## 学校を場とする放課後活動支援の効果2: —児童・生徒への肯定的評価を高める—

放課後子ども教室の学校内での実施は、中学校教員において対生徒意識に差を生む。学校内で放課後子ども教室を実施する中学校の教員の方が、生徒の友人関係、対地域住民とのコミュニケーション、規範意識向上、学習への積極性に肯定的評価が高い。

表10 放課後子ども教室の学校内での実施と教員の対児童・生徒への意識

	K県の小学 校教員	K県の中学 校教員	全国小学 校教員
1. クラスや学年を超えた友だちができるようになった	n.s.	33.3% *** 28.6%	n.s.
2. 地域の大人と挨拶をしたり、話をするようになった	n.s.	43.6% * 33.4%	n.s.
3. ルールや決まりを守るようになった	n.s.	29.0% ** 27.8%	n.s.
4. 宿題や勉強を積極的にやるようになった	n.s.	63.6% *** 37.2%	n.s.
5. 年齢の違う子どもと一緒に遊ぶようになった	n.s.	21.6% *** 25.8%	n.s.
n	1,327	782	1,213

(注:セルの上段は学校内で「放課後子ども教室」を実施する学校、下段が学校外で実施する学校に勤務する教員の「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の肯定的回答の割合。\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .05$ , \*  $p < .1$ )

## 学校支援地域本部の効果: —教員の職務軽減に対する意識あり—

学校支援地域本部のある学校に勤務する小学校教員は、学校を支援するボランティアが盛んであると認識し、教員の職務軽減への効果を認識している。

表11 学校支援地域本部事業の実施と教員の意識との関連

	全国小学校教員
1. 地域の人々のボランティアにより教員の仕事は軽減されている	44.9% *** 35.1%
2. 学校を支援するボランティアは盛んである	76.3% *** 65.6%
3. 地域の人々のお世話が大変になった(逆転項目)	27.1% * 23.9%
n	1,213

(注:セルの上段は「学校支援本部」のある学校に勤務する教員、下段が「学校支援本部」のない学校に勤務する教員の「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の肯定的回答の割合。\*\*\*  $p < .001$ , \*  $p < .05$ ) 23

## Ⅲ-2-3 教員の職務遂行の意識と学校・家庭・地域の連携の意識との関連

## 職務にやりがい感・同僚肯定感のある教員は 学校・家庭・地域の連携の意義、効果を高評価

表12 教員の職務上の意識と学校・家庭・地域との連携への肯定的意識との関連

	1.家庭や地域との連携は、学校運営や学級経営に不可欠である	2.家庭や地域との連携は、子どもの学力向上に役立つ	3.家庭や地域との連携は、子どもの規範意識の向上に役立つ	4.家庭や地域との連携は、教員の職務の負担軽減につながる
a.やりがい感 3群	60.9%(低群) ↓ 65.1%(中群) ↓ 80.3%(高群) ↓	47.9%(低群) ↓ 54.3%(中群) ↓ 71.3%(高群) ↓	57.4%(低群) ↓ 63.6%(中群) ↓ 76.8%(高群) ↓	10.1%(低群) ↓ 12.0%(中群) ↓ 21.0%(高群) ↓
b.同僚肯定感 3群	52.9%(低群) ↓ 71.9%(中群) ↓ 81.4%(高群) ↓	43.4%(低群) ↓ 59.1%(中群) ↓ 71.0%(高群) ↓	51.9%(低群) ↓ 68.4%(中群) ↓ 77.8%(高群) ↓	8.0%(低群) ↓ 13.9%(中群) ↓ 21.3%(高群) ↓
c.仕事負担感 3群	n.s.	n.s.	n.s.	17.6%(低群) ↑ 12.0%(中群) ↑ 13.6%(高群) ↑
d.マンネリ感 3群	78.4%(低群) ↑ 67.8%(中群) ↑ 60.1%(高群) ↑	69.0%(低群) ↑ 54.3%(中群) ↑ 50.3%(高群) ↑	74.9%(低群) ↑ 65.6%(中群) ↑ 57.4%(高群) ↑	19.3%(低群) ↑ 12.5%(中群) ↑ 11.4%(高群) ↑

注 1.表中の%は、職務上の意識の3群別にみた、学校・家庭・地域の連携の意味や効果について「とてもあてはまる」と回答した教員の割合、\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$   
2. やりがい感、同僚肯定感、仕事負担感、マンネリ感の3群は、因子得点を基にサンプル数を3分位にした。

25

## Ⅲ-4 教員のストレスと学校支援に対する意識

## 抑うつ尺度 SDS(Self-rating Depression Scale) —Zung,W.W.K.(1965)—

表13 抑うつ尺度	質問項目(20項目)	内容	いつも	しばしば	ときどき	めったにない
a	気が沈んで憂うつだ	憂うつ、抑うつ、悲哀	4	3	2	1
b	朝がたは、いちばん気分がよい	日内変動	1	2	3	4
c	泣いたり、泣きたくなる	啼泣	4	3	2	1
d	夜よく眠れない	睡眠	4	3	2	1
e	食欲はふつうだ	食欲	1	2	3	4
f	異性に対する関心がある	性欲	1	2	3	4
g	やせてきたことに気づく	体重減少	4	3	2	1
h	便秘している	便秘	4	3	2	1
i	ふだんよりも動悸がする	心悸亢進	4	3	2	1
j	何となく疲れる	疲労	4	3	2	1
k	気持ちはいつもさっぱりしている	混乱	1	2	3	4
l	いつもとかわりなく仕事をやれる	精神運動性減退	1	2	3	4
m	落ち着かず、じっとしていられない	精神運動性興奮	4	3	2	1
n	将来に希望がある	希望のなさ	1	2	3	4
o	いつもよりいららする	焦燥	4	3	2	1
p	たやすく決断できる	不決断	1	2	3	4
q	役に立つ、働ける人間だと思う	自己過小評価	1	2	3	4
r	生活はかなり充実している	空虚	1	2	3	4
s	自分が死んだほうがほかの者は楽に暮らせると思う	自殺念慮	4	3	2	1
t	日頃していることに満足している	不満足	1	2	3	4

筒井末春(東邦大学医学部心身医学)「うつ状態自己評価表」

※ 20点～80点に分布:40点未満→抑うつなし、40点台→軽度抑うつ、50点以上→中程度の抑うつ

## 対象教員(小学校教員)のSDS得点分布

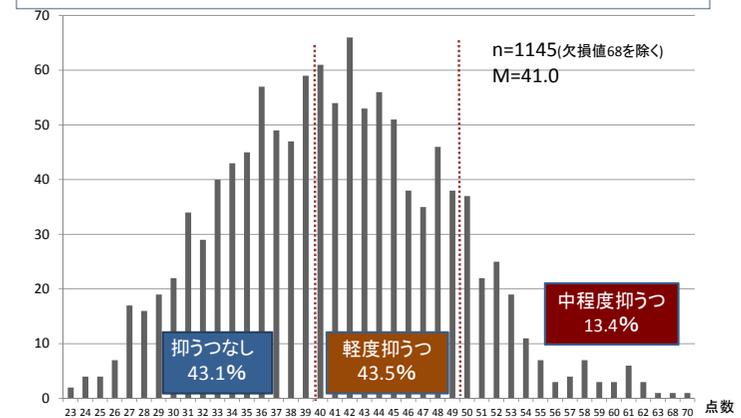


図11 SDS得点分布

## 保護者とのコミュニケーションの取れ具合と教員の抑うつとの関連

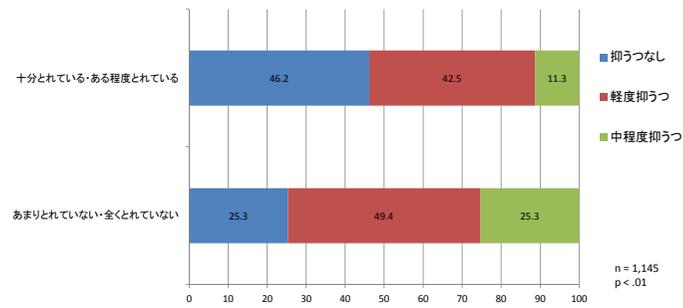


図12 保護者とのコミュニケーションの取れ具合と教員の抑うつとの関連

## 教員の学校・家庭・地域の連携に対する重視度と抑うつとの関連

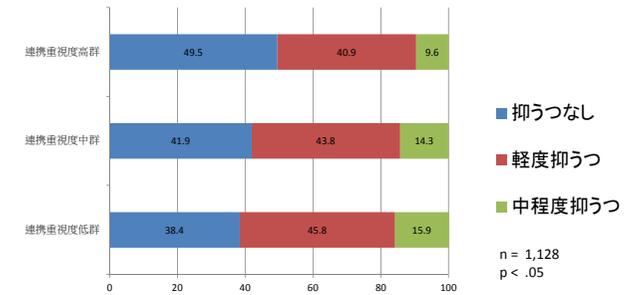


図13 教員の学校・家庭・地域連携の重視度と抑うつとの関連

## <主な参考文献等>

- 国立青少年教育振興機構『子どもの体験活動の実態に関する調査研究』報告書, 平成22年10月
- 明石要一、岩崎久美子、金藤ふゆ子、小林純子、土屋隆裕、錦織嘉子、結城光夫著『児童の放課後の国際比較—ドイツ、イギリス、フランス、韓国、日本の最新事情—』, 福村出版, 2012年
- 児童対象調査は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「初等教育段階の児童を対象とする放課後活動支援のあり方に関する国際比較研究(2010-2012,研究代表 金藤ふゆ子)」に基づく研究である。
- 教員対象調査は、日本学術振興会科学研究費挑戦的萌芽研究「保護者・地域住民の学校支援が教員の職務遂行に及ぼす効果に関する定量的研究」(2011-2013,研究代表 金藤ふゆ子)」に基づく研究である。